

兒童心理學 第三講

農村の子供

牛 島 義 友

今日は都市託兒所の子供と農村の子供の様に自然的、社會的環境が普通の幼稚園児と相違して居る子供達について考へてみよう。普通と違ふと言つても數の點から言へば斯る子供の方が遙かに多いのであつて、都會の中産階級の惠まれた子供は遙かに少數なのである。

此日本の子供の大部分を占める都市の無産者の子供や農村の子供は如何なる生活をし、如何に成長發達して居るであらうか。託兒所の子供は如何にも惠まれない子供達と見られて居るが、農村の子供を論ずる時には明るい大空の下ですくすく伸びて行く自然の子として惠まれた生活を想像する人が多い。農村の子供は果して惠まれて居ようか。ルソー以來都會人は自然に對してロマンティックな夢を見て居る。農村には玩具や娛樂機關は無くとも木の實や竹等

の自然物があり、弊害のある映畫を見る代りに自由に飛びまはる野や山がある。粗衣にくるまり、跣で馳けても、心は自由に健に成長して居る。或は都會兒の虚弱さに對し農村兒の頑強さが讚へられる。然し果して農村兒は健康であり、性格は曲りなく、智能は充分發達して居るであらうか。

乳兒死亡率の統計は農村の保健状態を裏切つて居る。次に昭和十三年度の乳兒死亡の統計を示す。之は死産を除いて出生後の乳兒死亡數を出生百に對する比率で示したものである。

道府縣

北海道

青森

一〇・六四

一五・〇八

三愛靜岐長山福石富新神東千埼群栃茨福山秋宮岩
奈

重知岡阜野梨井山川瀉川京葉玉馬木城島形田城手

一四・七三
一一・二三
一三・一五
一二・五四
一一・〇五
一三・四八
一〇・五五
九・八一
一一・九三
一四・一〇
八・四七
九・四八
一〇・七三
一六・六一
一六・六一
一六・四一
一六・五六
九・八七
八・七三
一二・八三
一一・二〇
一二・〇三
一三・七九

鹿宮大熊長佐福高愛香德山廣岡島鳥和奈兵大京滋
兒 歌

島崎分本崎賀岡知媛川島口島山根取山良庫阪都賀

一三・八七
一一・二八
一〇・六八
一一・二七
一四・二一
一〇・七四
一一・二二
一二・六一
一二・〇五
一一・二三
一〇・七六
一二・四九
一三・〇九
一〇・二八
一二・九七
一二・七七
一四・六二
一一・二八
九・六二
一二・八二
一〇・二七
九・六五

此表は直接都市と農村との比較にはならないけれども大都市の附近の場所と文化から離れた東北、北陸地方とでは死亡率に著しい相違が見られる。東京と言ふ大都市は子供の健康の爲にはよくないと言はれて居るが其死亡率は逆に最も低くなつてをる。即ち不健康な都市生活にも拘らず哺育、養護が行届いて居る爲に死亡率を低下させてをるのである。之に對し他の健康に恵まれて居る筈の農村地方では育児知識や育児習慣の缺陷の爲に悪い結果を生んだと考へられる。

其他寄生蟲、榮養状態、結核等の點から言つても農村は必ずしも健康の理想境ではない。同様に精神的方面から言つても農村を理想化して見るのは正しくない。如何にも農村には都會兒には見られぬ性格上の美點や意志的方面の發達が見られるかもしれない。併し又都會の者に比し劣つて居る諸點も澤山あり、之は放置してをく事は許されない教育問題であると思ふ。

先づ智能の發達状態について考へよう。愛育研究所に於ては神奈川縣の某村について年々智能検査や其他の研究を行つて居るが其一、二の結果を次に示す。精神發達簡易検査によつて國民學校新入生の智能測定をするに其平均は八三位の智能指數となつて居る。三番目のものは保育所兒に

ついて詳細にビネー式智能検査で測つたものであるが、其結果も簡易検査と全然同一であつて、三者の平均は八三・〇五となつて居る。

某村兒の智能指數

	人数	平均	標準偏差
昭和十四年度 新入生	78	83.08	16.36
昭和十六年度 新入生	96	82.24	17.17
昭和十六年度 保育所 年所平均	52	83.84	10.31
平均		83.05	

乃至三〇%しか居ないのであらうが同じ標準で田舎の子供を例へてみるに斯程まで多數にのぼるのであつた。

斯る諸事實から考へるに都會の子供の智能を一〇〇とすれば農村の子供の指數は八〇乃至九〇位と考へられる。之は十歳の子供について言へば智能が一年分か二年分位遅れてをる事を意味する。

次に他の例として言語發達について述べよう。農村兒は言葉が不得手であると言はれて居るが、吾々が語彙の検査

先年厚生省に於て農村に於ける精神薄弱者の調査をした事があるが、其時の四ヶ村の平均では五・八%も精神薄弱と數ふ可きものが居た。智能指數七〇以下の者都會では指數七〇以下の者は二

平均の理解力彙語

		人数	平均	標準偏差
幼稚園	A	81	55.37	7.91
	B	54	54.00	6.41
	C	32	55.91	5.94
	D	119	59.65	8.95
	計	286	57.00	8.26
ナースリー・スクール	A	72	57.21	7.80
	B	15	58.40	5.71
	C	54	54.33	8.83
	計	141	56.24	8.17
	都市託児所	A	80	49.53
B		24	47.75	10.05
C		87	48.79	9.06
D		69	50.39	7.45
計		260	49.35	8.67
農村託児所	A	212	42.09	10.32
	B	54	47.20	8.02
	C	42	43.71	8.97
	計	308	43.09	10.00

をした結果如實に其事が現れて來た。右の表は都市の幼稚園、ナースリー・スクール(滿一、三歳兒)、託児所と農村との語彙理解力の比較を示したものである。此數字は偏差値で示したもので、五〇點が中心となる數である。幼稚園は都會の四つの幼稚園で少しは異なるが平均五七・〇〇である。幼稚園より年少なナースリー・スクールの場合も平均五六・二四で大差がない。處が都市の託児所になるに平均四九・三五なつて成績が悪いが、農村はそれより更に低く平均四三・〇九になつて居る。都市幼稚園との差は十四點にも達して居る。

斯の様に農村兒童の知的發達は都會兒童に比して著しく

遅れて居る。此遲滞は如何なる原因で生じたのであらうか。或者は素質の差だと言ふかもしれない。農村の中優秀な者は離村して都會に出る爲に農村に残つて居る者は素質の劣つたものになり、其子弟であるから知的發達も遅れて來るのだと説く。如何にも斯る素質の違ひもあらう。併し教育特に家庭教育にも随分影響されて居るのではないかと考へられる。即ち生れた當座には大した差が無いのに成長するに従つて

大きな差が生じたのではないかと考へられる。此事を證明する様な事實がある。吾々の處では乳兒の精神發達をも検査する事が出来るが、親の職業別に子供の精神發達を調べてみるに次の様な興味ある事實が発見された。即ち乳幼兒發達検査を種々な年齢の子供九百五十四名に課してみるに一歳未満兒の場合には専門的職業の子供も熟練労働者の子供も大した差異はないが、一歳乃至四歳の者になるに上下に十點近くの差が現れ居り、五、六歳だに十四點以上の差が現れて居る。即ち乳兒期には殆ど差の無かつた者に對して環境の影響は年々共に著しくなり、幼稚園時代には著しい差を示して來て居る。此事實は單なる素質論で説明する事

は出來ず、環境の影響が極めて著しい事を示す。従つて今日託兒所や農村の子供の成績が悪いのも教育如何によつてはもつと向上させ、幼稚園兒も同様の水準にまで達せざる事が出来る事を教へて居る。茲に農村保育の重大なる使命が存する。

親の職業別發達偏差値

	一歳未満兒	一—四歳兒	五・六歳兒
専門的職業	53.94	55.89	57.79
半専門的並に 商業上級	53.44	58.15	52.25
半専門的並に 商業下級	50.98	51.51	49.50
熟練労働者	51.27	49.68	46.40
未熟練労働者	50.73	48.58	43.09

(偏差値は同一年齡群内に於ける發達状態を示す指数である)

では今日農村の子供は如何に保育され教育されて居るであらうか。國民學校では都市も農村も平等、同程度に教育してをる言ふかもしれない。併し問題は家庭教育特に幼児期の教育状態にある。今青木誠四郎氏が調査された農村保育

育狀況調査報告(愛育研究所紀要第一輯)によつて農村に都會知識階級との保育狀況を比較してみよう。農村兒數は一

六一名、都市兒數は二四五名であるが以下百分率で示す。(尙保育態度は代表的なもののみを掲げた。其他の態度もある譯である。従つて百分率を加へても一〇〇にはならない。)

食事に關して

	都會	農村
乳の時間を定めたもの	六二・三	一四・五
定めぬもの	三四・八	八五・五
泣けば直ぐ乳を與へたもの	二五・二	七〇・九
與へぬもの	七九・〇	二八・五
添乳せるもの	三九・六	六七・一
せぬもの	三三・七	一二・五
次子出産前に授乳を止めたもの	八四・五	六四・九
其後も與へたもの	三一	四・三
食事の時間が定めてあるもの	七一・八	三六・九
不定のもの	二三・〇	六三・一
間食の分量の定めてあるもの	七三・一	二四・一
好きなだけ與へるもの	二六・六	七六・〇
買食はさせないもの	九一・四	六四・八
させるもの	八・七	三五・二

食事に關しても斯の様に好ましくない状態が農村の方が極めて多い。尙離乳完了の時期をみるに都會では平均一年一〇ヶ月であるのに對し農村は二年八ヶ月かゝつて居る。

睡眠に關して

獨りで眠るもの

四六・四 五・九

誰かと一緒にねるもの

五三・六 九四・一

睡眠時間の定めてあるもの

九一・八 三六・九

不定のもの

七・八 六三・一

朝無理に起すもの

二五・四 一〇・三

然らざるもの

七四・六 八九・七

排泄に關してはおむつをはづした時期を調べてあるが、起きてゐる時には平均都會では一年七ヶ月ではづすが、農村では二年七ヶ月まで不自由な姿のまゝにさせられて居る。寝てゐる時には都會では二年一ヶ月までおむつをつけるが、農村では二年九ヶ月までつけてねる。

其他の教養に關して

何時も抱いたり負つたりしてゐるもの

五八・〇 六三・八

たもの

四二・〇 三六・二

然らざるもの

八・七 三九・七

働く時に子供を負さつてゐたもの

九一・三 六〇・三

然らざるもの

三三・六 九・五

遊ぶ時に家にゐる様に仕向けるもの

六二・五 九〇・五

然らざるもの

二・六 二三・四

賭遊びを放つておくもの

九七・五 七六・六

然らざるもの

七〇・九 三七・四

玩具を選択して與へるもの

三三・四

無選擇のもの

二七・四 六二・六

小遣錢を持たせるもの

五・八 二三・六

持たせぬもの

九一・九 七六・四

以上の表で詳細に分る様に農村の保育状態は全く放任的であり、無思慮的である。自然的之言へば全く自然的ではあるが斯る自然性は讚美す可きものではなく、改良し、反省す可きものである。

前にも述べた如く農村生活には教育上好ましいものも澤山ある事は認める。併し其缺點は缺點として素直に認め、其改善に努力しなければならぬ。或人は頭がよくちや百姓なんかやつて居れない。農村を維持するには智能や教育等はさうでもよいのだと暴言をばく人もある。併し此態度は農民をいつまでも小作人や農奴の様な状態に止めんさするものである。今後の日本の農民は科學的知識を持つて常に改良し増産して行かねばならぬ者であり、外地に向へば指導者として農業を經營して行かねばならぬ者である故に農村兒童の教育問題はもつと眞剣に考へねばならぬものと思ふ。